とも、郷里の父の死去によるとも伝えられている。郷里での四峰は京都の御典医ということで伯耆一円から患者が集ったということで、また儒学、仏教、キリスト教等の研究もしていたと伝えられている。明治以降再び京都に戻ったということであるが、その時期等については明らかでない。

四峰の長男、雄太郎は京都府立医学校を出て外科を専攻し、母校の助教授をしたのちドイツ留学をし、帰国後、大垣市で病院を設立し経営した。

四峰の次男良蔵も京都府立医学校を卒業し、帰国し郷里の津原で開業した。

他方、今井玄庵は慶応二年に病没し、その子頑治が医師となって、父と同じく浪人医師という藩の士族医師の資格を与えられて開業していたが、四峰の帰国によって、釛（コガネ）村（東伯町）に移った。

（鳥取県・森医院）

「八十五年京都産婦人科医界のあゆみ」

三木通三
森武史
伴一郎

明治初期は医学の黎明期であり、日本では和漢医と蘭学医が錯綜していた。この時、新明治政府は行政改革と共に、医学分野においても洋医学を勧めるよう示唆した。かつ多くの和漢医の洋医への転換をはかった。しかし当時の洋医学は専ら翻訳医学に頼ったものであり、このことは多くの殊に外科・産婦人科部門の臨床医達を困らせた。欧米医学書を独学自習で翻訳しながら、臨床手術を実施する彼等には、臨床で体験する多くの疑問点を一人で解決して行くのは至難のわざである。結果、複数の同系専門医の集まり、つまり相互の知識体験交換の場、今日でいう専門医学会の発足を喝望するに至った。明治二十年（一八八七）から明治三十年（一八九七）が、その期に該当する。またこの時

期は世界的にもパスツール（一八八八）、コッホ（一八九一）らが細菌学研究所を創立、また邦国でも北里柴三郎が伝染病研究所（一八九二）を創設した時代である。細菌学の進歩は感染を最大のテーゼとする外科・産婦人科領域の発展にも拍車をかけた。これらの要素が集まり拡大して行き、情報交換の場、即ち医学会の誕生を見るに致った。日本で最初の学会は明治二十三年（一八九〇）四月開催の第一回日本医学会総会（於東京）であり、京都では明治二十年（一八八七）の京都医学会、明治二十四年（一八九一）の京都医会らがそれぞれ発足している。

いずれにしても、この時代には全国的にあちこちに、そして専門医別に因る多種の医学会設立の気運を醸成（じょうせい）した時期と言えよう。

産婦人科医界においても同様、明治二十一年（一八八八）東京において桜井郁次郎が「桜井産科婦人科研究会」を創立した。遅まきながら、大阪においても明治三十五年（一九〇二）、緒方正清が「緒方婦人科学会」を発足させた。が、しかしこれらは何れも私的民間ペースの学会である。日本における最初の広域学会は「第一回関西産科婦人科学会」（於大阪府医学校）であり、内容的には全国レベルの大学会であった（明治三十二年（一八九九））。これを契機に地方単位での産婦人科学会誕生の気運が胎動し始めた。

しかし、こと京都に関しては、既に一地方での公的要素をもった専門医の集合「京都産科婦人科会」が明治三十一年（一八九八）六月十五日に発会していた。文献資料上では日本最初の地方公的産婦人科専門医学会である。

昭和三十三年（一九五八）から郷土史としての「京都産婦人科医界沿革史」の研究が進められてきたが、仲々その源流の発見には苦節をなめてきたようである。しかし昭和四十八年（一九七三）杉立義一氏が苦心の研究の結果、従来の俗説をさけ、明治三十二年（一八九九）前後に「京都産科婦人科会」の誕生あるを看破した。

今回われわれは、更にそれを追試し、その原点をつきとめた。その外貌は当初われわれが想像していた有名人ではなく、名もなき数名の町医者たちが積極的に京の街に音頭を取って創った学会であることが判った。その概要を述べると「私立京都産婆看病婦養成所」（明治八年（一八七五）創立）の教師連が相互情報交換をしたことに始まる。彼等の

構成メンバーは、伝統医家京都賀川家の門人、当時の新進気鋭京都府医学校出身者、それに検定医らであった。産科学を学生に教える傍ら、開業医の彼等は自家で体験した多くの珍しい症例を相互交換し、互いに研究し合った。しかし最終的には、既に本邦で名を成していた京都府医学校の教諭、高山尚平、足立健三郎、外国から豊富な知識を持ち帰った佐伯理一郎・大月文をかつぎ出して、結果「京都産科婦人科会」の結成と開花させた。翌年、高山・足立・佐伯・大月らは大阪の緒方正清らと結束し、「関西産科婦人科学会」を発足させている。全国レベルでのこの学会を、ある意味においてプロモートしたのは、実はこの小さな地方専門医会「京都産科婦人科会」ではなかろうかと考察する。

（京都市）

緒方正清と産婦人科学史

石原　力

緒方正清（一八六四―一九一九）は、産婦人科医としてもすぐれた業績をあげ、また大阪府・市医師会長として医政面でも活躍した浪花医界の重鎮であったが、さらに医史学の領域でも、特に『日本婦人科学史』及び『日本産科学史』の大著をのこすなど、多大の貢献をなしている。今回は医史学者緒方正清の学問的成長における産婦人科学史を跡付けてみたいと思う。

緒方正清の産婦人科学史研究は、一八八四年（明治一七）に始まるようである。すなわち『日本婦人科学史』及び『日本産科学史』の年表によると、この年、「緒方正清、日本産科沿革考を公にす」と記されており、ときに正清二〇歳、香川県の高松医学校を卒業後、東京大学医学部別課に在学中のことであった。これについては富士川游も、『日本婦人科学史』の序で、「緒方正清君ハ現下、我邦医